

GRAZIA

“グラッツェ”

“グラッツェ”とはイタリア語で“ありがとう”の意味。陽気なラテン民族の言葉に倣って、素直に感謝の言葉を口にできる明るい場作りを、本学科は心がけています。

祝! 体験学習の成果をポケットに詰め……

国際コミュニケーション学科一期生、新しい門出

2005年度に新設された国際コミュニケーション学科、そこに入学した1年生達の横顔がまだ記憶に新しいというのに、あっという間に時は過ぎ、ついに卒業時期を迎えました。学科の教員らの熱意の下の4年間、それぞれの進路に枝分かれして旅立ってゆく後ろ姿に、教員スタッフらも万感の思いです。

卒業生にインタビュー①

学科が特色ある授業として立ち上げ当初から力を入れてきた体験学習、机上を越えた学習スタイルの中で成長していった学生たちの、それぞれの収穫は？

以下、体験学習報告書からの抜粋

F：ずばり、人間嫌いが治ったような気がします。コミュニケーションという人間関係にとって最も基本的なことを、様々な体験を通して自然にそのスキルが身に付いたのかな、と思います。就職後の自分が今は楽しみです。
K：僕は英国で現地調査をしたのですが、その時に培った計画性や行動力は就職活動におおいに生かされた気がします。小さな課題を一つ一つクリアしてこそ初めて得られる自信の積み重ねが、僕を強くしてくれました。

A：現地のことは人から伝え聞いてはいたけれど、やっぱり百聞は一見にしかず、自分の目で確認してみれば、それは机上の知識とは比べ物にならないほど、自分にとって役に立っています。“とにかくまず行動”、この考え方は、これから仕事を始める自分の背中さえ押ししてくれそうです。

U：大学に在籍中の出来事で一番忘れられないのは、挫けそうになった時、先生達が一生懸命励ましてくれたこと。それは留学先でもそうでした。私の気持ちや悩みを一緒に考えようとしてくれた事や、“あなたはあ

なたのままでいい”と言ってくれた米国の英語の先生の言葉を、私はしっかり心に刻んで勇気に代えて、次の道へ行きたいと思えます。

M：ザンジバル島の同世代の若者に触れて自分の未熟さ甘さが浮き彫りになり、だから“これから”を意地でも頑張るって思ってる。

N：外に出たから逆に、今度は働きながら自分の国ニッポンをもっと知ってやろうという覚悟ができた。

F：人と人との間に壁を作ってしまうがちだった私が、体験学習をきっかけに変わった。就職活動がうまく行ったのも、その成果、かも……。

S：相手の文化を少しでも理解する訓練、社会を生き抜くそんなノウハウは、この学科から私たちにへの贈り物だったように思う。

N：体験学習をきっかけに今までの自分が一回崩され、新しい考え方やモノの見方ができあがったような気がする。それはつまり、大人になれたってこと。

S：中国で出逢った他国からの留学生のハングリー精神に刺激を受けた。何十年後かに、彼らと一緒に仕事をするようになっていたら、面白いな。

U：留学生活を通して、英語へのモチベーションが上がり、結果としてそれを生かせる仕事に就くことができた。

K：体験学習を通して様々なことを考え、結果、自分が変わることができたのが学科在籍中の最大の成果だったと思う。

N：教員になる予定だが、米国の英語学習の方法論がまだ日本ではあまり知られていないので、ぜひ、自分の仕事で活用したいと思う。

U：体験学習をする前の自分は内気だった



<http://www.meisei-u.ac.jp/dpt/International/>



が、それを終えた後の自分は明らかに、自分から情報を求め、動くタイプに変貌していた。**自分にもできる!**という自信を得られたことが大きかったのだと思う。そういう意味で、自分にとっての体験学習は、成長なき内弁慶タイプからの卒業となった。

M: 同じ場所に集まった同世代の若者たちと、同じ釜の飯を食べ、同じ場所で寝るといふ、濃いつながりができたことが**私にとって最大の財産**。卒業後もみんなとは連絡を取り合っていきたいと思う。

Y: 世界の公用語とも言える英語ができるようになったことで、世界が一気に広がった。日本では自分の意見を押し殺すのが良しとされているけれど、海外では真逆。現地で無理矢理に“自分の意見”を求められていたら、

自然に**“自分の頭でモノを考える力”**

がつくようになっていた。それが収穫かな。

S: 日本の常識は非常識。世界の常識は日本の非常識。とにかく毎日が発見、だった。最初は馴染めず、戸惑いばかりで、何のために留学しているんだろうと悩むことさえあったのだが、その苦しさを乗り越えたところで初めて掴めたのが“自信”だった。様々な不安を乗り越えた**自分を褒めてあげたい**。

M: 「言葉が通じなくても仲良くなれる」ということを実感したのが、中国での体験学習でだった。自分を成長させてくれた現地の仲間たちとの別れは辛く、最後のパーティーでは思わず泣いてしまったほど。友達のありがたさに**国境は関係ない**な、と思った。

卒業生にインタビュー②

“**大学生活のトリ、就職活動は、どんな感じだった?**”

以下、『キャリア開発支援講座』の質疑応答からの抜粋

蓋を開けてみれば、学科一期生たちの進路は実に様々。学科で学んだ内容を直接活かせるような職業についた人から、分野は違うけれども自分に合う職種を探し続けた人まで。次に続く後輩(3年生)のために企画されたキャリア開発支援講座で卒業予定学生らからあがった声を、下にまとめてみました。

—就職活動を始めた時期は?

人気が高い客室乗務員は、3年生の10月くらいから、平均的には3年生の2月の合同セミナー時期で、外資系は4年生の6月というところも。

—何社受けた?

10社の人もいれば、100社の人も(40~50社という答えが多数)

—行きたい業界をどうやって見つけた?

自分が食べるのが好きだったから外食産業を選んだという人から、小学生からの夢で客室乗務員という夢追い系派がいる一方、実際は、就職活動をやりながら、この仕事もアリかなと思って決めた現実派が多数。

—体験学習の経験は就活に活かされたか?

留学中に自分の立ち位置(進路)を考えることができたのが良かった、履歴書にネタとして書けた、自信がついたのでそれが面接に役立った、など。

—就職の内定が出たのは?

人によってばらつきがあるが、だいたい4~8月という人がほとんど。

—その企業を選んだ決定打は?

人事の人の良さや、そこで働いている人の仕事に対する思いを聞いた時、または会社訪問をした時に出逢った先輩社員さんの笑顔。面接の時に言われた「あなたの夢をここで叶えて下さい」という台詞に、自己実現の可能性を感じたからとの意見も。

—大学の就職課は役に立った?

サイトは情報が一方的だけど、就職課は相手が人なので、勇気づけられ励まされるのでよく利用した、面接指導はとても役に立った、自己PRの書き方やエントリーシートの書き方を教えてもらったのが良かった、など。

—ズバリ、受かった最大の理由と思われることは何?

ほぼ全員が口を揃えて言っていたポイントは三つ。①やりたいことが明確に決まっていた ②人に自信を持って話せるネタを在学中に作ることができた ③就職活動を楽しみながらやった。

—以下が一期生たちの就職実績です。

南方航空、日本マクドナルド、際コーポレーション、第一生命保険相互会社、損保ジャパン情報サービス、トヨタレンタリース神奈川、フォーバル、ガリバーインターナショナル、横浜トヨペット、アパグループ、佐川グローバルロジスティックス、トヨタ西東京カローラ、日本ミシュランタイヤ、ベネッセスタイルケア、比較.com、スーパーアルプス、臨海セミナー、JA相模原、大学院進学、公務員など

『ご卒業、おめでとうございます!』

教員スタッフ一同より



キャリア開発支援講座第一回で体験談を披露してくれた学科一期生たち

最後に、学科主任・田中先生より、これから就職活動を始める二期生たちにアドバイスです。

「就職活動に一番大切なのは、“自分自身の棚卸し”です。自分が大学の時にやったことを三つ、詳細を書き出してみれば、だいたい自分の興味分野、能力などが見えてきます。そこで自分の性格に向けた仕事が見つかるの

で、その線で仕事を探すと近道です。気をつけて欲しいのは、その業界が好きだからその業界をといった形で仕事を選ぶと、見当違いの仕事に就く可能性があるということ。旅行が好きだから旅行会社をといっても、会社は人事や総務などまったく旅行に関係のない仕事をいっぱい抱えているので、そこは注意して下さい」

学科の卒業生の佐藤さん、国際学会で受賞

学科の卒業生で、現在、大学院人文学研究科に在籍中の佐藤洋一くんが、“4th International Symposium of Politeness”という国際学会で、“Young Scholar Award”を受賞しました(同賞では3名が受賞し、佐藤くんは最優秀者に次ぐ第2位の受賞)。これを受けて、7月2日~4日、ハンガリーのブダペストで行われたシンポジウムで、佐藤くんは論文発表を行いました。

約半年間かけて製作したという受賞論文の概要は、『日本人と中国人が英語でコミュニケーションした時の、会話の表現方法(丁寧語を使用したり、日本語や中国語を介在させたり)における考察』。「修士論文でポライトネス理論をやっていたので、国際的な場で発表したいと思って参加したところ運良く受賞となり、大変うれしく思っています。論文独特の言い回しや、専門用語の使い方とても苦労しましたが、論理的に書く方法を経験できて、本当に良かったです」と佐藤くん。

これから学術分野でどんな活躍してくれるのか、ますます楽しみです。

四川大地震で募金を行った本学科学生、西南大学より熱烈な歓迎を受ける



学科内で募金活動を行い、西南大学に寄付金を届けた3年生の大橋慶一くんらが感謝状を頂きました。「きっかけは、田中先生の『西南大学には四川省出身の子がたくさんいて困っているんじゃない?』という言葉でした。最初は自分が“何かしてあげよう”とやり始めたことなのですが、やっていくうちに、自分の方が周囲の人たちから“何かをしてもら

った”という感覚に変わっていきました。相手に喜んでもらったことで、自分の方がうれしくなり、結果的には、僕の方が周りから“頂いたもの”が多かった気がします」。

西南大学へのフィールドワークに参加した学生、教員を中心に声をかけ、集められたお金は77,500円。「僕らは気軽な感じで現地の先生にお届けするつもりだったのですが、西南大学側では学長・副学長、さらに赤十字の人までが出席して感謝式典を開いてくれて、横断幕まで掲げられていたのにはびっくりでした」。大橋くんが、西南大学のキャンパス内を歩いていると、度々学生に声をかけられたそう。「西南大学のHPでもかなり大々的に取り上げてくれていたようで、見知らぬ人が僕の名前を知っていて『あの明星大学の学生さんだよ』と。中国語で“明星”っていうのは、“スター”の意味ですから(笑)」。

大橋くんにとって、中国訪問はフィールドワーク、個人旅行を含め、今回が3回目。「日本での中国のイメージは良いものばかりではないので、将来、僕は日本と中国の架け橋になりたいです」。本学科らしい温かな国際交流が感じられる出来事でした。

こんなことがありました! 9月▶3月編

“フィールドワーク報告会”開催

秋も深まってきた11月、世界各地でフィールドワーク・コンテクストスタディをしてきた先輩から後輩へ、その体験を伝える報告会が行われました。

英国のウェストミンスター大学で“ロンドンの音楽事情”を研究した学生は、ライブハウスに『バンドを見に行く(ついでにお酒を楽しむ)』日本と、『食事をしに行く(ついでに音楽を聴く)』英国の違いを説明。またニュージーランドのマッセイ大学に留学した学生は、『日本の子どもたちは言語によるコミュニケーシ

ョンが極端に少ない』ことを指摘、学生・教員らにちょっと考えさせられる問題提起してくれました。

さらに、中国の西南大学を訪れた学生たちは、同大学の日本語学科の学生たちと、書道や楽しそうな模様を写真で披露。発表者の『例え中国語に自信がなくても、現地学生が習いたての日本語でフォローしてくれるから全く問題ありません!』という言葉に、これから中国へ向かおうとしている後輩たちが、幾分の安堵を見せる場面も。そして、今年で三回目となるタンザニアチームは、歴代の先輩達が紡いできた友情を確認すべく、報告書でもおなじみとなった現地女性を訪問。先輩たちの足跡を彼女を通じて確認したほか、

セカンダリースクールで日本を教える授業を担当したりと、回を重ねるごとにプログラムも現地ですっかり根を張りつつあるようでした。

本学科のフィールドワークの舞台は国内も対象です。“自分の国ニッポンを知る”というテーマのもと、国内で活躍した外国人の足跡を追ってレポートしてくれた学生や、本学科に在籍する外国人講師たちを夏祭りなど外に連れ出し、彼らの視点を通して改めてニッポンを視るという体験を発表してくれた学生も。

フィールドワークの2009年度/今年インドが加わります。年々ワールドワイドに広がっていく学科の拠点、また報告が楽しみです。



留学サポーター 大募集

国際教育センターでは、『留学サポーター』を募集しています。留学サポーターとは、留学経験のある先輩が、留学関連のイベントに参加しながら、これから留学予定の後輩たちに、勉強や生活についての様々なアドバイスをしあげる、というものです。自分達の経験を後輩達のために役立てようという心意気のある人からの多数の応募を、お待ちしております。

問合せ・申込先

日野校 国際教育センター(23号館407)

☎ 042-591-5176

✉ office@flc.meisei-u.ac.jp

学科の愉快的仲間たち【教員編】

教養深く、学生思いで、個性的な、本学科の教員たち。授業の中だけではなかなか触れられないその素顔をお伝えします。(もっと詳しい記事が見たい方は、明星大学の学科ホームページを御覧下さい)

先住民族の心の豊かさを

・茅野佳子



「留学した先で体験したショックや感動が、今の仕事の原点になっています。つい一昨年も、アメリカ南西部の先住民族のお祭りを見学する機会があったんですが、彼らの生活に刻まれた伝統的な自然観が本当に魅力的でした。例えば、“鷲の踊り”というのがありますが、父なる空と母なる大地とを結ぶ鳥である鷲になりきって、祈りと感謝を捧げ踊ります。お祭りの期間は御馳走が山のように用意されていて、知らない人にでもふるまってくれるのです。」機能効率だけが求められる世界ではないの、と茅野先生は付け足した。

「都立高校の英語教諭をしていたのですが、教員対象の語学研修で初めて米国の地を踏んだのが23歳の夏休み。そこで、米国のイメージとかなり違う面に気づいたんです。例えば、ヨセミテやグランドキャニオンといった国立公園の中には、先住民族が「暮らして」いたんです。国というのは実はとても重層的で、移民大国の米国では特にいろんな民族的背景をもつ人々が複雑に絡み合って暮らしている。それをもっと知りたくなりました。」教員として仕事をして5年目、28歳の時にオレゴン州への長期留学をした後、日本に戻り、また教員の仕事に復帰したが、米国の文化・文学に対する好奇心は覚めやらず。そんな時に日本語を教える代わりに院生になれるというプログラムを見つけ、以来トータル10年、米国に暮らすことになった。ミシシッピで米国南部の歴史に深く入り込むことになった先生は、黒人の歴史や文化に関心をもち、明星大学教員となった後、今度は研究員として先住民族の多いニューメキシコに滞在した。

「親しくなった先住民の知人は、事前に計画を立てるということをせず、その時々で都合がつくとぶらりと私を訪ねてくるんです。その時私が不在だったり、都合が悪くても、それはそれで仕方がない、また次の機会にとさらりと受けとめる。その感覚が私にとっては新鮮でした。現状で自然に起こることが重要で、あとは起こった状況を受け入れる。“他力”に身を委ねるというその考え方が私にはとても印象的でした。」

「少数民族にこそ光をあて、私たちが失いかけている自然に根ざした古い知恵や知識を学んでいきたい。」茅野先生の言葉には、強い決意のようなものが感じられた。最近ではアイヌ民族の歴史や文化に注目し、支援活動を始めたという。

生粋のマルチリンガル

・ジョン・イングルスルード



見た目はいわゆるガイジンだけれど、生まれも育ちも生粋のニッポン人。家庭での共通語は英語だけれど、外で使っていたのは日本語。「当時はバイリンガル・トリリンガル教育という言葉はおろか、一人で多言語を習得するというのは歓迎されていませんでした」。いわゆる“ちゃんぽん”生活を大学入学まで続けた結果、先生の脳はその場面場面に応じて、自然に言語の使い分けをするようになった。「世界を広く見渡せば、ちょっと教育を受けている人は二つ三つの言語を操るのが普通ですから」。

米国・ミネソタ大学で日本文学と言語学を専攻した後、日本に戻って教職についたが、学士だけでは足りないと感じ始めて24歳で再び渡米、英語教育と応用言語学を学んだ。「その後は熊本県の短大で英語を教えていたんですが、そこで転機が訪れました。一緒に働いていた外国人の先生が『あなたは日本生まれの日本育ちで働いているから、我々のように外国から日本にやってきて、異文化の中で苦労している人たちの気持ちがわからない』って私に言うんですね。私は外見はガイジンですが、心は日本生まれの日本育ちだから、確かに海外から日本にやってきて苦労している人たちの気持ちはわかりません。ならば自分もどこか異文化に飛び込んでみよう、よし中国へ行こう!と決めました」。ジョン先生の最初の赴任先は揚子江の東にある、中国科学技術大学。「日本も米国もある意味私にとっては母国ですから、中国が初めての異文化。最初2年間は何もわからない赤ちゃんみたいな状態で、時間が止まってしまったような毎日でした。私もこれでやっと、異文化と格闘する人々に助言や意見を言えるような立場になれたと思いました」。

ジョン先生は、英語・日本語・中国語に堪能なトリリンガル。「夢は何語で見るとですか?」「すべて、です。場面に応じて出てくる言語が違います」「人は喋る言語で性格が変わると思いますか?」「性格、ではなく、相手への接し方が変わります」「状況に応じて、脳の中で並列で自然に言語が切り替わるんですか?」「そうです。研究ものは英語、教える時は日本語、カンフー映画の時は中国語というように、“コンテンツ”によって、言語が切り替わります」。

自らの役割を“外国語学習のヘルパー”と称する先生は、日本人、アメリカ人、中国人というカテゴリーを完全に越えていた。

Wanted

学生編集スタッフ募集中!

将来マスコミの仕事をしたい人、またはイラストなどで自己表現をしたい人、記事を書きたい人など常時募集中。企画段階から実際に形になっていくまで、全てを自分で体験できるので、とてもやりがいがありますよ。積極的な参加をお待ちしています。

これは是非載せて欲しい!の記事&情報大募集

“GRAZIE”は、学生のみなさんと作っていくメディアです。より充実した内容にいくために、どんな些細なことでもネタをお待ちしています。

【応募先】〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1明星大学国際コミュニケーション学科
Tel 042-591-5329またはinfo-com@eal.meisei-u.ac.jpまで

「編集スタッフの眩き」

大学生生活は自由な分だけ、何もしなければそのまま過ぎていくし、何かを積極的にやれば後々につながる貴重な財産を作ることができる。すべてはその人の姿勢次第、まだ在学中の学生さん、悔いのない、ステキな四年間を! Y■